ヘ3
2378
234

遠13
2378
234

戯作者だろう世の嬉しきものあらじ。証跡もなき無益語をつき厚名を共
に方ふ知らるる日が心ふ欲してもせられぬ事の作とりて胸の鬱気を散ずるほど外
から為ぬ段あれば僕ごとき拙作者も原来師匠のお蔭ゆえ此頃もっぱら大
江戸へ出ずくるくと捻んでゐる事。仏とする徳ゆえ本張も道具もいろいろ。矢
立二丁紙四五枚あそこらの片隅であのぐるふ書誌せばいつしか一部のさうし出
来る。抑谷我主の三筋道の義の志情たるうて人の能知る所なれば嫖客の
一筋ふ顔かたまるし義理に孝行背ふ変じる源。是人古今ぬ不安事の老面白くなり
ヤ仁及ず。其上聞所仮寝のすきま枕も判る急作老作も面白の雪れ景色の
平ふ閑居ゆえの徴美の一筋乃も理ふかるるも忘れぬ。評判を頼ようとも閑居
芳もあるまい。お隅田の川が長川の伝のごとく向川夜船美の松まつる物語ふ
なむ

孟陽發兄　　油街仙鶴堂舗面ふおいて

熟田　笠亭仙果識

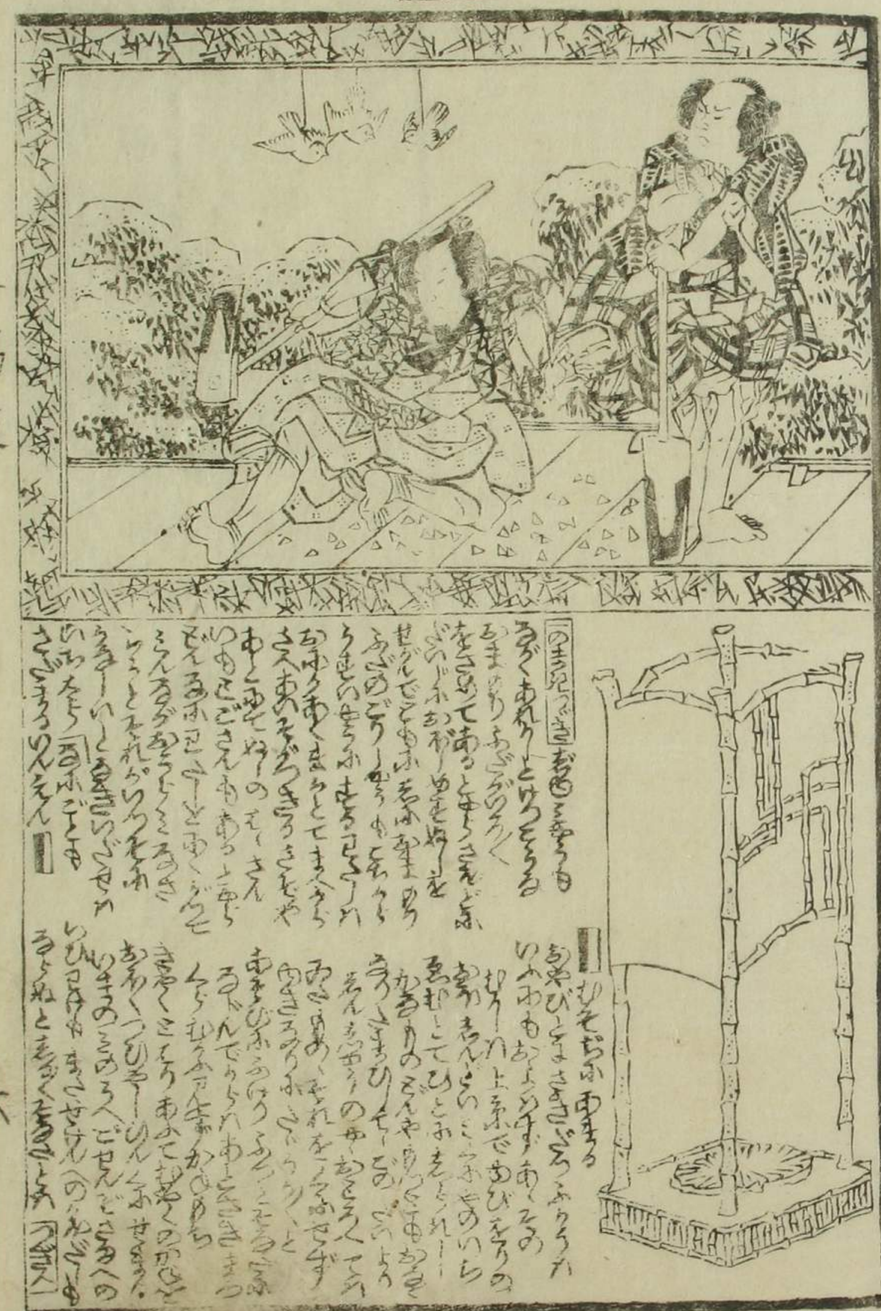
京都六條
三筋町
娼家
雁金屋内
糸女

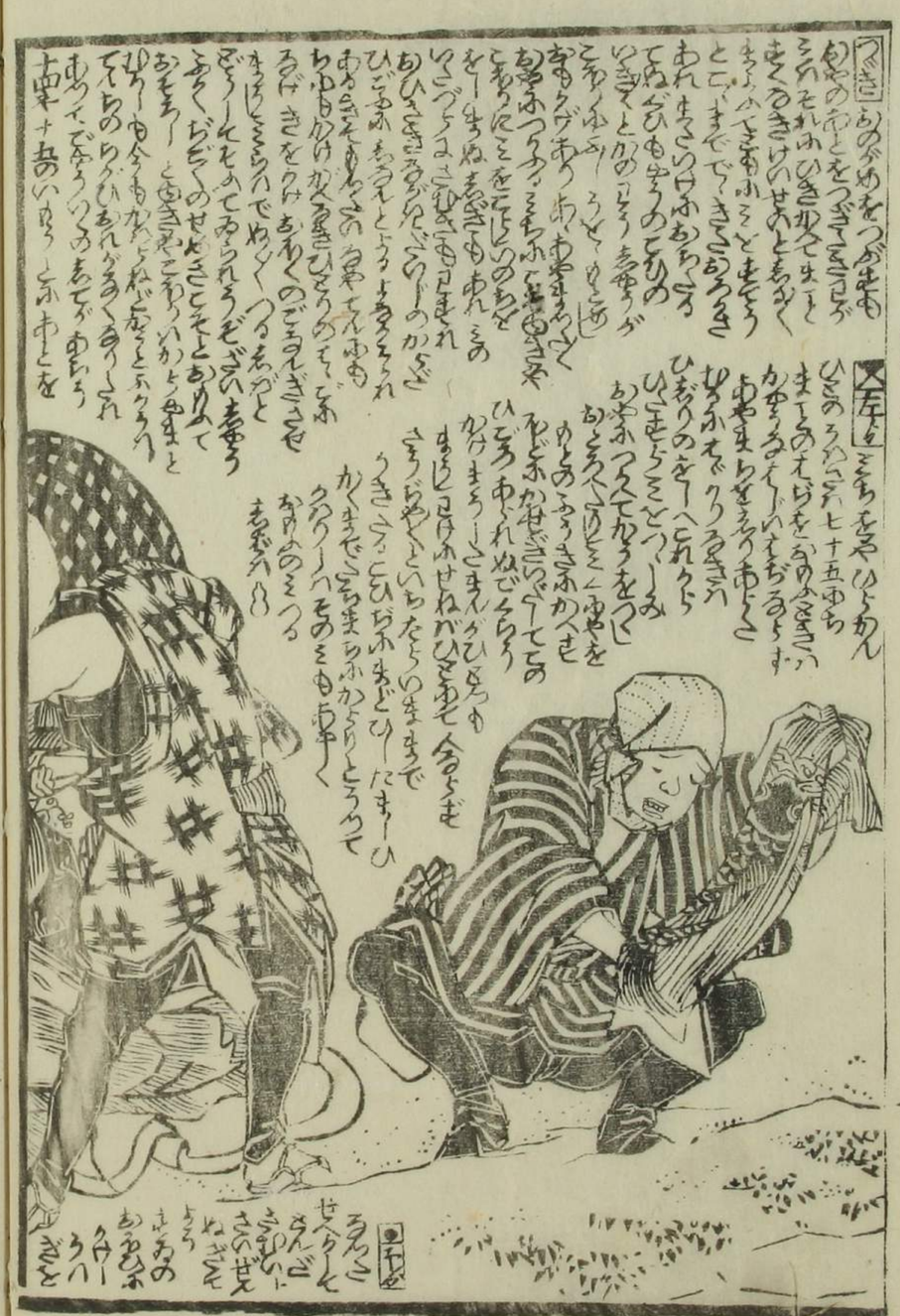
京都松原通
造酒屋
菊酒屋
女
阿菊

同長者町
金物問屋
三國屋
市太郎
後ふ
醴屋孝助

孝助妹
於信
松友
橘屋内
よし
水

菊酒屋
主管
定七



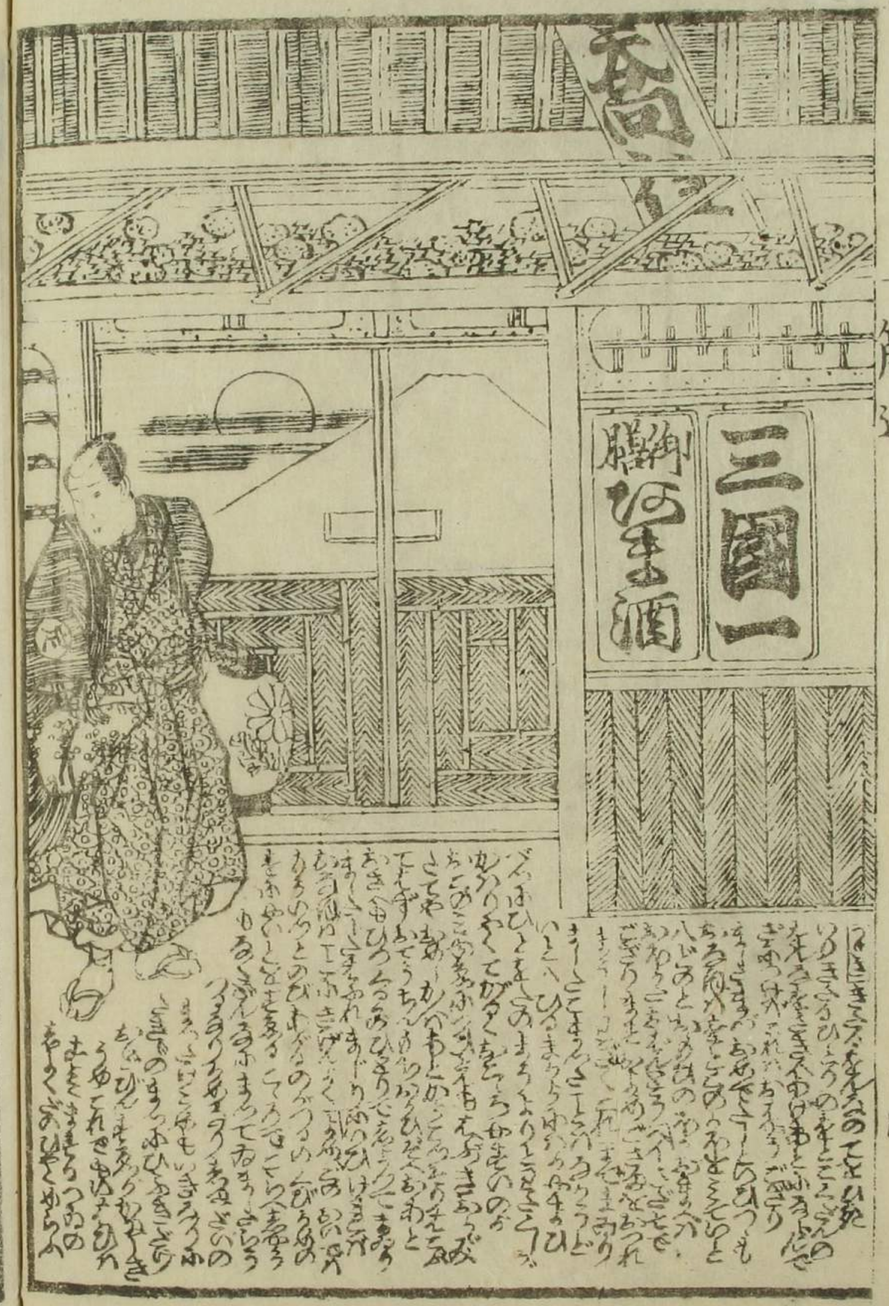


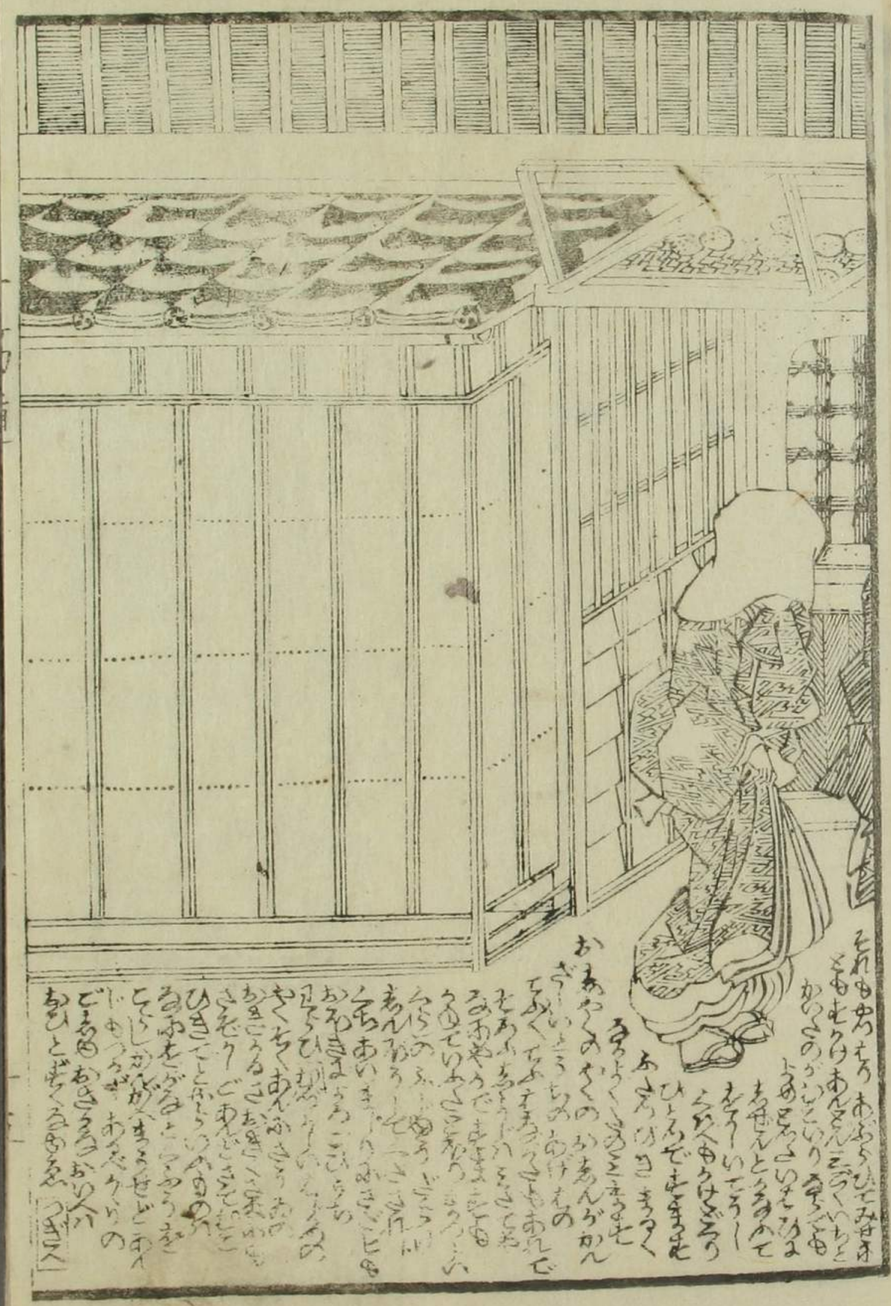
京洛
鴨川西岸
青楼喬居
光景

國芳画　仙果作

下冊
國芳画
仙果作

つぎ　あまり　まをとこところいのでも
もまをろうけれどもわがおまをろいいもとも
おまをろうごいのんろけてるあのへのおろふ
ろうぬおろもとこといれぬろうもさを
られぬやをでいろうのいろろくまをろす
かろくもろこのゆいのひさ——もまをこれるる
これるれもけいはのもまをまをんるまをこを
まをこをまをろをひこをまをろのこをいかをんんとまをろいより
いろこんこれれのこをのこをいこをはゆろいある
ろをひあねをひまをとこをまをもをこをこをこをもこをこをもこをこをこを


三國一
御膳酒



一勇斎國芳画
笠亭仙果作
浄書千形道友